

Title	熾仁親王行實(高松宮御藏版)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.4 (1929. 12) ,p.155(663)- 156(664)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19291200-0155

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

うな米國本位に比較的陥つてをらず、其の取扱つた國民は古今東西文明未開各方面を網羅し、歐米諸國の外、印度もあれば、支那もあり、亞弗利加南洋の蠻族もある。而して本書に載せられた文獻は本書の基礎をなすもので、上は希臘羅馬の古典より下は現代歐米諸國の各種調査報告にまで及んでゐる。全章に亘り、著しい見解に度々接することは出来なくとも、此の豊富な資料を活用し複雑な事象をよく整理し、綜合して巧みに前記五段に歸入せしめた點に敬意を表しなわけにはゆかぬ。加ふるに譯文平易明快、一氣に讀了せしめなければ止まない。尙ほ書中の支那に關した事項については、博士は卷末に補註を特設し、解説を施されてゐるが、これまた錦上更に花を添うるの觀がある。

嘗て義塾文學部の一學生として博士の講筵に列するの榮を得た余は、今や本書を手にし、欣快の情に堪へず、研鑽日尙淺き身にも拘はらず、敢てかゝる蕪雜な紹介を試み、本書を江湖に推奨する次第である。(宮島貞亮)

熾仁親王行實 (高松宮御藏版)

幕末より明治初期にわたつての有栖川官熾仁親王の御偉勳は實に赫々たるものである。東征大總督、福岡藩知事、元老院議長、西南の變の征討總督、日清戰爭當時の參謀總長としての御活躍は何人も記憶する所である。

すでに、親王の御事歴は明治三十一年宮内省の命に依り熾仁親王行實十五卷となつて刊行されてゐるのである。然しこの本は根

本史料の蒐集保存を主とし、資料の全文を其儘引抄してある爲に専門歴史家の參考とはなるが、一般世人の閱讀には不便である。なほ其の上非常に浩瀚なものであり印刷部數もわずかに數十に過ぎないので今日に於ては之を得ることが困難である。大正十二年有栖川宮廢絶と共に高松宮がその祀を繼がせらるゝことになり、同宮は前記の熾仁親王行實を改めて、通俗易解を旨として編述することを命ぜられた。そこで平山成信、杉榮三郎兩氏が顧問となり、武田尙氏が幹事、久保得二、芝葛盛、布施秀治、武田勝藏の四氏が編修となつて昭和二年二月より編修に着手し、同四年八月に至つて完成し、直ちに出版されたものである。

本書編修の本旨は主として舊行實に準據したものであるけれども、引用文書は何れも出所を正し、その原文に従つたが讀み易からしむる爲に多少文字を改め、送り假名等を加へ、又關係の諸官街社寺を始めとし、徳川、池田、溝口、常盤井等の御親戚、及び北島男爵等より従前殆ど遺却された文書類を採録し、又維新前後並に明治時代の史實に關する著書は概ね參照し、又陸軍大將安東男爵を始め舊有栖川宮家扶等親王に朝夕陪侍した數氏の談話を聽取したと言ふ。更に舊行實出版の際は、事の機密に屬する爲め或は直言を避け、或は故らに省略したものも少くなかつたが本書を編修するにあつては時世がすでに過ぎてゐるので特に忌諱の必要ないものは悉くこれを記入したと言ふ。かくして本書は舊行實の面目を一新して通俗平易に書き改めらるゝに至つたのである。

本書は菊版上下二卷、表紙には宮家の御紋章を付し、題籤は紺

川實枝子刀自の揮毫にかゝり、初めに高松宮の題字をかゝり、本文の合計八九四頁にのぼつてゐる。

本書の内容については、すでに編修者武田勝藏氏が本誌（八卷三號）に「熾仁親王行實を畢りて」と題して紹介されてゐるからして之を省略し、こゝにはその目次を擧ぐるに止める。第一章御幼年時代、第二章御成年時代、第三章攘夷建白と、公武合體の經過、第四章攘夷勅問奉答並に朝參停上（上）第五章、同（下）、第六章大政復古と總督、第七章東征大總督並に東下（上）、第八章同（下）第九章東京御移徙、第十章福岡藩知事、第十一章御東歸、第十二章元老院議長並に議定官、第十三章、山陵視察供奉、第十四章西南の變と征討總督（上）、第十五章同（下）、第十六章陸軍大將兼議長、第十七章左大臣兼任、第十八章東國巡奉供奉、第十九章憲法制定の御翼賛、第二十章露國皇室御訪問第二十一章歐米各國御巡遊、第二十二章御歸朝後の三年間、第二十三章參謀本部長と近衛郡督（上）第二十四章同（下）、第二十五章參謀總長兼任、第二十六章神宮祭生兼任、第二十七章明治二十七八年戰役と大本營出仕、第二十八章舞子御靜養と薨去、第二十九章御性行の一斑、第三十章學問技藝の御造詣、第三十一章嗜好と遊戯の御事ども、第三十二章御轍事、第三十三章妃貞子略歴、第三十四章妃董子略歴等の各章を立て、國事多難なる幕末より明治初期に至るまでの親王の御偉勳御德行を非常に詳細に且つ平易に記述してゐるのである。而して、上卷の初には親王を中心とした有栖川宮略系圖をのせ、又熾仁親王略年譜八五頁を附して親王の御行動と重要な史實との對照を便とし、更に各國勳章受領表を附してゐる。且つ又本書

の各所には諸家の藏品中より興味多く、且つ珍らしい寫眞約六十葉を挿入してゐるのである。

尙ほ熾仁親王印譜を別冊としてゐる。これは和裝で、その紙數九十九枚、その内に親王が常に用ひられた約七十種に亘る御印章が收められてゐるのである。（今宮 新）

日本文化史年表

（清原貞雄編
中文館發行）

編者清原博士は人も知る廣島文理科大學教授にして斯界に重きをなす人、氏はその序にいはれる。

此事が遂行せられたなら、世を益するや否やは扱て措き、少くとも自身に取つてはさぞかし便利であらうと思つて居つた。

と（勿論、これは氏の謙遜の言葉ではあるが）兎に角文化史に重點を置いた詳しい年表を作らうと云ふ事は氏の二十年來の懸案であつたらしい。

天皇、紀元干支年號より「政治、經濟、宗教、教育、學術文藝、美術工藝」の六項目に分ち、支那、西洋の年代、重要事項を參照として、神武天皇の御即位より、昭和三年十一月十日、京都に於ける今上天皇の御即位大典の舉行迄を含み、加ふるに索引及び御歴代一覽（御謚、御即位年）將軍執權一覽、年號一覽（一段下は北朝年號）の三附録を以てしてある。

日本文化史研究者、否國史研究者の便利の爲にお薦めする。（捷子勝二郎）